

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 31 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720251

研究課題名(和文) 英語の史的統語変化に関する生成理論的研究：パラメーターモデルの精緻化を目指して

研究課題名(英文) A Generative Study on the Diachronic Change of English Syntax: Toward a Fine-Grained Theory of Parameterization

研究代表者

縄田 裕幸 (NAWATA, Hiroyuki)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：00325036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では「強い極小主義のテーゼ」に基づき、英語の史的統語変化を駆動するメカニズムとして「素性継承パラメーター」を提案した。これによれば、英語の解釈不可能な一致素性は話題主要部から定性主要部を経て最終的に時制主要部へと、機能範疇の階層関係を通時的に下方に推移したことになる。この仮説を通時的コーパスによって検証し、英語史における空主語の消失、主語位置の変化、他動詞虚辞構文の発達、that痕跡効果の出現を分析した。

研究成果の概要(英文)：On the basis of the Strong Minimalist Thesis, this study proposes the "Feature Inheritance parameter" as an underlying mechanism of the diachronic change of English syntax. Specifically, it is argued that uninterpretable agreement features diachronically shifted downward, from the Topic head through the Finite head and finally to the Tense head. This hypothesis is explored through empirical corpus investigation of the following phenomena in the history of English: the demise of null subjects, the shift of subject positions, the development of transitive expletive constructions, and the rise of the that-trace effect.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：極小主義 言語変化 パラメーター 素性継承 英語史 空主語 他動詞虚辞構文 that痕跡効果

1. 研究開始当初の背景

Chomsky (1981) *Lectures on Government and Binding* (LGB) において提案された「原理・パラメーター理論」は、人間の話す個別言語がなぜかくも異なっているのかという言語の多様性の問題、さらに子供が限られた刺激に基づいて豊かな言語知識を獲得できるのはなぜかという言語習得の論理的問題—いわゆる「プラトンの問題」—にわれわれが実質的に取り組む道筋を開いたという点で、生成文法史上で大きな意味を持つ。

また、LGB は共時的な研究ばかりでなく通時的研究も大きく活性化させた。言語間の文法的変異をパラメーター値の違いに帰着させる原理・パラメーター理論を通時的研究に応用することで、文法変化を「パラメーターの再設定」として捉えることが可能になったのである。その結果、比較言語学的手法により言語変化のメカニズムが明らかとなり、通時的立場から普遍文法 (Universal Grammar: UG) の解明に貢献する研究成果も現れた (Roberts (1993), Lightfoot (1991, 1999) など)。

しかしながら、90年代以降の極小主義モデル (Chomsky (1995) 以降の一連の論考) で文法原理の整理・統合が推し進められるのに伴って、可変的パラメーターを伴った諸原理が複雑なモジュール構造をなしているという LGB 的な文法観は、もはや維持することができなくなってしまった。とりわけ、Houser, Chomsky and Fitch (2002) で UG の原理が「回帰的併合 (recursive Merge)」に限定されるという見解が提示されるにおよび、近年ではパラメーターの存在そのものに疑義が呈されるようになってきている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に上記のような生成文法理論の現状をふまえて、現行の極小主義モデルの主導理念である「強い極小主義のテーゼ (Strong Minimalist Thesis: SMT)」に合致するパラメーターモデルを提示することである。

- ・ 強い極小主義のテーゼ：
言語はインターフェイスの可読性条件に対する最適解である。(Chomsky (2000: 96))

第二の目的は、提案されたパラメーターモデルを英語の通時的統語変化に適用し、その妥当性を検証することである。具体的現象としては、英語史における空主語の消失、主語位置の変化、他動詞虚辞構文の発達、that 痕跡効果の出現が含まれる。これらの多様な変化を制限されたパラメーターによって説明することを試み、記述的妥当性と説明的妥当性をともに満たす言語変化の理論を構築することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、まずは理論研究を先行して行い、それによって得られた仮説を個別事例研

究によって検証する手法を採用した。

(i)理論的研究：極小主義におけるパラメーターの位置づけ、および形態論と統語論のインターフェイスに関して研究を行った。具体的には、本研究の理論的基盤である極小理論および分散形態論の最新の動向を探るため、文献調査を進めるとともに国内外の関連学会に参加し、情報を収集した。その成果は論文⑤にまとめられている。

(ii)個別事例研究：理論的研究によって得られた「素性継承パラメーター仮説」(次節参照)を検証するため、英語の空主語の消失、主語位置の変化、他動詞虚辞構文の出現と消失、that 痕跡効果の出現に関して史的コーパス (Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English (PPCME), Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)) を用いて資料を収集し、関連する現象について分析を行った。その成果は論文①②③④および学会発表①②にまとめられている。

また、本研究を通して得られた成果や知見を、著書①②に反映させた。

4. 研究成果

(1) 素性継承パラメーター

本研究の主たる理論的提案は、英語の史的統語変化が下記の「素性継承パラメーター」の推移によって駆動されたというものである。

- ・ 素性継承パラメーター：
フェイズ主要部 Force に基底生成される解釈不可能な一致素性は、言語ごとに異なる非フェイズ主要部へと継承される。

解釈不可能な一致素性がフェイズ主要部から下位の非フェイズ主要部へと継承されるという「素性継承」の着想は Chomsky (2008) によるものである。また、Richards (2007) はフェイズ不可侵条件 (Phase-Impenetrability Condition: PIC) の観点より、素性継承が概念的な必然性を持つ、すなわち SMT に合致することを導いた。さらに、Rizzi (1997) に端を発する近年のカートグラフィー研究により、CP 領域が従来考えられていたよりもはるかに豊かな構造を持つことが明らかになってきた。CP 領域の最上位にある Force がフェイズ主要部であり、その下にある Top(ic), Fin(ite) などが非フェイズ主要部であるとすると、フェイズ主要部 Force に基底生成された解釈不可能な一致素性がどの非フェイズ主要部に継承されるかに関して、必然的にパラメーター可変域が生じることになる。これが本研究の提案する「素性継承パラメーター」の骨子である。素性継承自体が SMT に合致するかぎりにおいて、素性継承パラメーターもまた SMT と矛盾しない。

(2) 英語史におけるパラメーター変化

上記の素性継承パラメーターに基づき、本研究では英語における解釈不可能一致素性の分布が次のように変化したと提案した。

- 古英語から初期中英語：

[ForceP Force [TopP Top_{[u]number} [FinP Fin_{[u]person} [TP T]]]]

- 後期中英語から初期近代英語：

[ForceP Force [TopP Top [FinP Fin_{[u]number} [u]person] [TP T]]]]

- 後期近代英語以降：

[ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [TP T_{[u]number} [u]person]]]]

古英語から初期中英語にかけては、解釈不可能な数素性 ([u]number) が Top を、解釈不可能な人称素性 ([u]person) が Fin を、それぞれ占めていた。その後、後期中英語になると [u]number が Top から Fin へと推移した。最後に後期近代英語期に [u]number と [u]person がともに T(ense)により担われるようになった。

また、各時期における素性継承パラメーターの変化は、動詞屈折接辞の衰退によって引き起こされたと主張した。すなわち、後期中英語における [u]number の Top から Fin への推移は数の一致形態素-en が-e への弱化が引き金となり、後期近代英語における [u]number, [u]person の Fin から T への推移は動詞語幹に時制と一致の形態素が共起しなくなったことによって生じた。したがって、上記の統語的パラメーター変化は言語獲得の際に生じるものであるが、その原因は言語使用のレベルにおける形態的变化に求めることができる。

それぞれのパラメーター変化とそれに伴う統語変化の関係は、以下のようにまとめられる。

- [u]number の Top から Fin への推移
 - 空主語の消失
 - 主語位置の変化
 - 他動詞虚辞構文の発達
- [u]number, [u]person の Fin から T への推移
 - that 痕跡効果の出現

以下、それぞれの具体的事例について上記のパラメーターに基づいた説明を試みる。

(1) 個別的事例研究

① 空主語の消失 (論文②④, 学会発表①)

PPCEME を調査した結果、空主語が生産的であったテキストが初期中英語に集中して後期中英語ではほとんど観察されないこと、また空主語は従属節よりも主節で頻繁に生じたことが明らかとなった。このことは、空主語の消失が素性継承パラメーターの変化によるものであること、また古英語・中英語で見られる「空主語」が実際には空の話題要素として認可されていたことを示唆している。

そこで、本研究では日本語や中国語などの

空主語を認可する以下の解釈規則が古英語・中英語にも適用されていたと提案した。

- 空主語が話題要素として TopP 指定部にある場合、談話連結 (context linking) によって指示性を得ることができる (cf. Huang 1984, 1989)。

初期中英語と後期中英語でゼロ形代名詞主語 (pro と表記) が生じる構造をそれぞれ次のように表される。

- 初期中英語：

[ForceP Op_i Force [TopP pro_i Top_{[u]number} [FinP Fin_{[u]person} [TP T]]]]

- 後期中英語：

*[ForceP Op_i Force [TopP Top [FinP pro Fin_{[u]number} [u]person] [TP T]]]]

いずれの場合も、主語代名詞は [u]number を担う機能範疇の指定部に生起している。初期中英語では TopP 指定部にある空主語は ForceP 指定部の話題演算子 (Op と表記) によって束縛されることにより談話連結され、適切に認可される。しかし、後期中英語では pro は FinP 指定部に生じているため談話連結の対象とはならず、指示性を得ることができない。よって空主語は後期中英語期に消失した。

② 主語位置の変化 (論文①)

空主語の消失に関する上記の分析は、素性継承パラメーターの変化 (具体的には [u]number の分布の変化) とともに英語の主語位置が通時的に下方に推移したという仮説に基づいている。この予想を確かめるため、PPCEME によって中英語の従属節における主語・時の副詞・定形動詞の語順を調査したところ、次の2点が明らかになった。

- (i) 初期中英語では「主語-副詞-定形動詞」「副詞-主語-定形動詞」のいずれの語順も観察され、前者は代名詞主語および旧情報主語によって、後者は新情報主語によって好まれる。
- (ii) 後期中英語でも引き続き両方の語順が観察されるが、主語の情報構造ステータスによる好みは観察されない。

このことから、初期中英語から後期中英語にかけて、主語および時の副詞の統語的位置が以下のように再分析された提案した。

- 初期中英語：

[TopP Subj. Top_{[u]number} [FinP Adv. [FinP Subj. Fin_{[u]person} [TP T]]]]

- 後期中英語：

[TopP Top [FinP Subj. Fin_{[u]number} [u]person] [TP Adv. [TP Subj. T]]]]

初期中英語では上位の主語が TopP 指定部を占め、話題要素として解釈される。そのため、この位置は代名詞主語や旧情報主語によって占有される。それに対して、後期中英語に

おける2つの主語位置の間には情報構造上の違いはない。そのため、「主語-副詞-定形動詞」語順と「副詞-主語-定形動詞」は自由変異となったのである。

③ 他動詞虚辞構文の発達 (学会発表②)

主語位置の変化に関する上の結論は、他動詞虚辞構文の発達によっても裏付けられる。この構文では虚辞 *there* が上位主語として、他動詞の外項が下位主語として同時に生起する。PPCME の調査によれば、他動詞虚辞構文は初期中英語期には観察されず、後期中英語になって初めて現れた。上の分析が正しければ、虚辞 *there* は話題要素としては解釈されないため初期中英語では TopP 指定部に現れることができなかったが、後期中英語になると *there* が FinP 指定部を、他動詞の外項が TP 指定部を、それぞれ占めることができるようになったと分析される。

④ *that* 痕跡効果の出現 (論文③)

PPCME, PPCEME, PPCMBE の調査により、ゼロ補文標識に主語痕跡が後続する例は初期近代英語までは観察されるが、後期近代英語では見られないことが明らかとなった。このことは、英語における *that* 痕跡効果の出現が、解釈不可能な一致素性の Fin から T への推移によるものであることを示唆している。

主語痕跡の認可に関して、本研究では Rizzi and Shlonsky (2007) の分析を修正し、主語を認可する「主語基準」が FinP 内部における以下のいずれかの構造によって満たされると提案した。

(i) [_{FinP} DP [_{Fin} TP]]

(ii) [_{FinP} Fin+Phi TP]

(i) では主語 DP と Fin が指定部・主要部関係にあり、それによって主語基準が満たされている。また (ii) では Fin に付加した一致素性が主語 DP と一致することで主語基準が満たされる。

その上で、初期近代英語と後期近代英語でゼロ補文標識に主語痕跡が後続する構造を示すと、それぞれ以下ようになる (ここでは一致素性を Phi と表示する)。

・ 初期中英語 :

Who_i do you think [_{ForceP} *t_i* that [_{FinP} Fin+Phi [_{TP} help+T [_{vP} *t_i* *t_v* John]]]]?

・ 後期中英語 :

*Who_i do you think [_{ForceP} *t_i* that [_{FinP} (*t_i*) Fin [_{TP} T+Phi [_{vP} *t_i* help John]]]]?

初期近代英語では、Fin に付加した一致素性は主語 *wh* 句の基底位置を c 統御することで主語の値が付与され、網掛け部分において主語基準が満たされている。それに対して、後期近代英語では Fin は一致素性をともっていないので、主語 *wh* 句は主語基準を満たすために FinP 指定部に移動しなければならな

い。しかしそうすると、「基準を満たす句はその場で凍結する」という基準凍結により *wh* 句の取り出しは不可能になってしまうので、この構造はどのようにしても適切に認可を受けることができない。ここから、一致素性が Fin から T に移行したことにより *that* 痕跡効果が英語に出現したことが説明される。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

① NAWATA, Hiroyuki “Temporal Adverbs and the Downward Shift of Subjects in English: A Pilot Study,” 『近代英語協会 30 周年記念論文集』, 203-218, 英宝社, 東京, (2014) 査読有.

② NAWATA, Hiroyuki “Verbal Inflection, Feature Inheritance, and the Loss of Null Subjects in Middle English,” *Interdisciplinary Information Sciences* 20, 103-120, (2014) 査読有.

③ 縄田 裕幸 「CP カートグラフィーによる *that* 痕跡効果の通時的考察」, 『言語変化—動機とメカニズム—』, 120-135, 開拓社, 東京, (2013), 査読無.

④ 縄田 裕幸 「古英語・中英語における「空主語」の認可と消失—話題卓立言語から主語卓立言語へ—」, 『島根大学教育学部紀要』 46, 101-110, (2012) 査読無.

⑤ 縄田 裕幸 「極小主義における通時的パラメーター変化に関する覚書—「言語変化の論理的問題」の解消に向けて」, 『島根大学教育学部紀要』 45, 71-82, (2011) 査読無.

[学会発表] (計 2 件)

① 縄田 裕幸 「屈折形態変化の統語的影響—英語史における「空主語」の消失を例として—」, 日本英文学会第 85 回大会シンポジウム「文法化と語彙化とカートグラフィー—統語論と形態論の境界をめぐって」, 2013 年 5 月 25 日, 東北大学.

② NAWATA, Hiroyuki “Feature Inheritance as a Reflex of Diachronic Change: Evidence from Transitive Expletive Constructions in the History of English,” The 13th International Diachronic Generative Syntax Conference, June 5, 2011, University of Pennsylvania.

[図書] (計 2 件)

① 島山 雄二・寺田 寛・縄田 裕幸 他 『書評から学ぶ理論言語学の最先端 (上) (下)』, 開拓社, 東京, 2013, xii+233pp. (それぞれ pp. 22-41 を分担) .

② 田中 智之・縄田 裕幸 他 『統語論』, 朝倉書店, 東京, 2013, vii+145pp. (pp. 29-55 を分担) .

6. 研究組織

(1) 研究代表者

縄田 裕幸 (NAWATA, Hiroyuki)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号 : 00325036